9. 自閉症などに関する基本的な理解と支援の手立て

（1） 自閉症などの概要

自閉症は、他者との社会的関係の形成の困難さ、言葉の発達の遅れ、興味や関心が狭く特定の物にこだわることを特徴とする発達の障害です。その特徴は３歳くらいまでに現れることが多いが、成人期に症状が顕在化することもあります。

また、これまで自閉症、広汎性発達障害、アスペルガー症候群などのいろいろな名称で呼ばれていましたが、近年では自閉スペクトラム症と表現することも増えています。スペクトラムとは連続していることを意味し、自閉スペクトラム症が主に社会性やコミュニケーションの質的な不具合により生じる障害であり、同じ自閉スペクトラム症でも周囲の理解や対応によって一人一人の困難の状況が変わってきます。

（2） 自閉症などのある幼児などに見られる行動等の特徴

同じ特性でも現れ方は一人一人異なり、当てはまることも人それぞれですが、次のような行動等の特徴が見られることが多いとされています。

〇人との関わりに関すること

・呼びかけても返事をしない

・視線が合わない

・他の幼児に興味を示さない

・表情を見て相手の気持ちを理解することが難しい

・相手の気持ちや状況を考えず、関わり方が一方的になってしまう

・悪気はなく相手を傷つけたり、その場にそぐわない言動をしたりしてしまう

・集団で活動することが苦手

〇コミュニケーションに関すること

・話し言葉が出ない（気持ちや言いたいことを上手く言えない）

・「これ」「それ」「あれ」などの指示語では伝わらないことがある

・質問に質問と同じ言葉を繰り返して答えたり、独り言が多かったりする

・話すスピードや抑揚が平坦など、特異な使用が見られる

・普通の言葉遣いではない独特の言い方や自分の好きなことだけを一方的に質問し続けたりすることもある

〇興味や関心やこだわりに関すること

・興味や関心の幅が狭い、または偏りがある

・同じこと、同じ物へのこだわりがある

・パターン的な行動として同じことを繰り返す

・一度気になったことがあると、そのことにとらわれてしまい、他のことができないことがある

・自分で決めた順番ややり方にこだわる（その順番ややり方は効率的でないことが多い）

・急な予定の変更や初めての場面が苦手である

・特定の事物に興味や関心が集中することがある。例えば、動物や植物、カレンダーや乗り物など。それに関する多量の知識を驚くほど身に付ける場合がある

〇感覚に関すること

・感覚に過敏や鈍さがある

《視覚》視覚の過敏性の例：些細な光をまぶしがる

《聴覚》聴覚の過敏性の例：特定の音（大きな音や高い音、泣き声など）に耳をふさいで嫌がる

《触覚》触覚の過敏性の例：手に物が付く、顔に水がかかる、帽子をかぶる、靴下をはく、抱っこされるなどを嫌がる

《痛覚》痛覚の過敏性の例：少し触れただけでも強く叩かれたように感じてしまう

痛覚の鈍さの例：けがをしていても痛がる様子がない。血が出ていることに気が付かない、気が付いていても平気である

《嗅覚》嗅覚の過敏性の例：好きなにおいと嫌いなにおいがはっきりしている。特定のにおいを嫌がる

《味覚》味覚の過敏性の例：一定の味のものを嫌がる。極端な偏食がある

〇注意・集中に関すること

・集中することが難しい

・何か見えたり聞こえたりすると、そちらに注意がいってしまう

・集中し続けてしまう。促しても別な方向に注意を向けることが難しい

〇運動・動作に関すること

・手指機能に不器用さがある

・身体の使い方にぎこちなさが見られる。協調運動（キャッチボールや縄跳びのように手と手、目と手、足と手などの個別の動きを一緒に行う運動）が不得意

・姿勢の維持が難しい

〇模倣に関すること

・先生や他の幼児を見て自分からまねして行動しようとしない

・他の幼児の活動に注目したり、模倣したり、同じ活動を並んでしたりすることが苦手

こうした姿は遊びや生活の場面の随所で見受けられます。自閉症などのある幼児などの実態を把握するためには、どのような場面でどのような姿に注意すればよいのかについて知っておくことも大切です。以下に、いくつかの例を示します。なお、幼児期は、これから、興味や関心が広がったり、言語を獲得したり、他者と関わったりしていくようになる時期であることに十分に留意する必要があります。

・情緒の状態（不安傾向の有無、心理的な過敏性の有無など）

・行動特徴（注意集中が困難、興味や関心が移りやすい、多動性の有無と程度、固執性・こだわりの有無、常同行動の有無、身近な危険の察知や回避の可否、衝動的な行動の有無、粗暴な行為の有無など）

・対人関係（視線が合うか、名前を呼ばれて振り向くか、他者への働き掛けがあるか、他者からの働き掛けへの反応、他者の立場や心情の理解、遊びの際の他者との関わり、集団活動への参加状況など）

・意思の交換や言語（簡単な言葉の指示が分かるか、文字や数字の理解があるか、どのようなコミュニケーション手段をもっているかなど）

・身辺処理等の状態（食事の可否、衣服の着脱の可否、排泄（せつ）の可否、簡単な片付けや手伝いの可否など）

（3）自閉症などのある幼児などの抱える困難さに応じた支援の手立て

幼児期には、幼児は家庭において親しい人間関係を軸にして営まれていた生活からより広い世界に目を向け始め、生活の場、他者との関係、興味や関心などが急激に広がっていきます。

自閉症などのある幼児などは、その特性から「自閉症などのある幼児などに見られる行動等の特徴」で示した行動等が結果として現れているなど、特性による生きづらさを抱えています。

自閉症などのある幼児などが、遊びや生活の中でどのような困難さを感じ、そういった困難さに応じてどのような支援の手立てがあるのかを考え、当該幼児の実態に応じた支援をしていくことが大切です。自閉症などのある幼児などの困難さや困難さに応じた支援の手立てとして以下が考えられます。

①自閉症などのある幼児などの抱える困難さと困難さに応じた支援の手立て

自閉症などのある幼児などへの支援に当たっては、「安心していられること」「分かりやすいこと」「頑張れること」が重要です。この３つの視点をもちながら、「時間」「場所」「活動」などを目で見て分かるようにすること、当該幼児が自ら理解して行動できるよう環境を整えることが大切です。そうすることで、当該幼児が自発的に行動することや自分でできる喜びを味わう機会も増え、自信につながります。

〇支度の場面

登降園時に、なかなか支度に取りかかれなかったり、支度や着替えが一人でできなかったりする場合、活動の見通しがもてなかったり、気が散ってしまったりすることが原因として考えられます。帽子やカバンなど、「何を」「どこに」が当該幼児に分かるように絵や写真で目印を示したり、支度や着替えの手順表など活動の手順を視覚的に示したりして、目印や手順表を見ながら自分でできるようにしていくことが考えられます。写真や絵、ひらがな文字など、その子に合った方法で目印や手順表を作ることが大切です。

また、「いつから」「いつまで」が分かるように時計やタイマーなどを活用することも有効です。時計の絵や写真に印をつけて示すなど、時計と見比べる習慣を身に付け、

将来的に時計の理解につながることを見据えて支援します。

支度や着替えが終わった後、本人にとって嬉しいことや好きなことがあるという見通しがもてると、意欲的に取りかかることができるため、支度や着替えが終わった後に何があるのかを本人と話し合って決めておくことも大切です。

〇朝の会の場面

想像力のつまずきにより、先を見通せない不安や急な予定の変更への不安が生じることがあります。障害特性として「同じ」にこだわるのも、このことが原因の一つと考えられます。本人が納得して活動の場へ移動したり、活動に取り組んだりすることができるようになるため、「いつ」「どこで」「何をする」「次は何をする」についてその子が理解できる方法で、目に見えない時間を視覚的にスケジュールにして示すことが大切です。

朝の会で使用しているクラス全体の予定表では、どこを見てよいのか分からなかったり、絵や写真が活動とつながらなかったりして見通しをもてていない場合は、個別に本人用のスケジュールを用意し、終わったら外していく方法や外さずに今の活動に印を付けていく方法など、当該幼児の反応を見ながら、その子に合った支援をします。毎日の積み重ねを通して園での生活に見通しをもてるようにスケジュールの理解を教えていくことはとても大切です。また、スケジュールに変更があるときには、不安による混乱を軽減するため、事前に伝えて本人の納得感を得ることが重要です。

先生が話をしているときに頻繁に発言してしまう場合には、朝の会の中で質問できる時間を設け、話を聞く場面と発言してよい場面のメリハリをつけるようにします。クラス全体の「約束」として、先生の話を聞くことや質問は後ですることなどを徹底することが大切です。集団で活動するために必要なルールを伝える際には、より伝わりやすくするため、イラストなどで「静かにします」と示すことも有効です。

また、視覚的、聴覚的な情報であふれている環境では、気が散ってしまい、注目すべきものに集中することができなくなるため、できるかぎり指示や提示の仕方を整理して当該幼児が集中しやすい環境づくりをすることが大切です。例えば、絵本の読み聞かせなど、注目してほしい場面では、読み手の背景に掲示物や展示物などがあれば外したり、カーテンなどで覆ったりするなど、より注目しやすくなるようにします。

〇製作活動の場面

手先が不器用だったり、やり方が分からなかったりして、製作活動に参加できず、離席が目立つ場合には、先生が手伝ったり、注目しやすい工程表を用意して一つずつ「何を」「どうする」を視覚的に示したりします。その際、個別に支援が必要な幼児に対しては、先生が援助しやすい席に座らせて、「手伝って」カードや個人用の工程表を用意して援助します。

また、感覚の過敏さが原因となり製作活動を楽しめない場合は、苦手な刺激を把握しておき、事前になるべく避けられるよう準備します。苦手なこと（視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚等）を我慢させるというよりも、その苦手な刺激にさらされず、安心して過ごせるようにすることが大切です。例えば、工作で手にのりが付くことを嫌がるのが分かっているのであれば、スティックのりを準備しておく、すぐに手が拭けるように手拭きを準備しておくなど、苦手な音があれば、音源から一番離れた位置にする、または、イヤーマフ（耳栓）を使用するなど、できるだけ事前に予測し準備することが必要です。

〇給食の場面

偏食（激しい好き嫌い）がある場合、味覚や嗅覚の過敏さや色や形態、素材へのこだわりが原因となっていることが考えられます。無理強いすることはせず、苦手な食べ物の量をかなり減らして配膳し、おいしく楽しい雰囲気の中で、先生とのやり取りを通して苦手な食べ物に少しでも挑戦できるよう、焦らず長期的な視野をもって取り組むことが大切です。

また、一人でできることが広がるよう、給食の準備や手洗い、うがい、歯磨きなども、手順表を用意します。その際、指示は一度に一つから始め、伝わって指示どおりできることが定着したら、一度に提示する指示の量を増やしていくようにします。

〇遊びの場面

遊びを切り上げられない場合には、遊びの終了の合図の前に個別に終了の予告をして一緒に片付けを始めたり、次に何をするのか、次いつ遊べるのかなど、スケジュールを確認したりして、本人が納得して切り上げる準備が整ってから全体に向けて終了の合図を出すようにします。遊びで作った物や遊んだ物などを置く場所を決めて、そ

こへ置くことで遊びを切り上げられるようにすることも有効です。

また、遊んだ遊具や絵本などを片付ける場所に絵や写真で目印を付けて視覚的に分かりやすくして、自ら片付けに取り組めるようにします。自分で片付けることは、活動の終わりを意味し、活動の切り替えの理解につながります。

遊具を使う順番やおもちゃの貸し借りなどで他の幼児といざこざが生じてしまう場合、クラス全体に対して順番や貸し借りのきまりを周知しておきます。その際、幼児期は、幼児同士のいざこざを通して折り合いを付ける体験をし、きまりの必要性に気付いていく時期であることへの配慮も必要です。幼児同士できまりを考えるなど、先生の一方的な指導にならないように配慮したり、遊具の取り合いでいざこざが生じたときに先生が別の遊びに誘ったりするなどの工夫もあります。さらに、遊具を複数準備するなどのいざこざを未然に防ぐために環境を整えたり、当該幼児に伝わるように絵カードで示したりすることも大切です。また、怒りが抑えられないことが課題となっている場合、怒りが抑えられないときの対応を事前に本人と先生で話し合い、視覚的に怒りのレベルとレベルごとに何をすれば落ち着けるのかを決め、その活動ができるように準備しておくなど、気持ちのコントロールへの支援が重要です。

〇行事の場面

行事が近くなるとその準備でいつもと異なることが多くなり、見通しがもてずに不安になる場合があります。この場合、月の予定や週の予定、一日の予定や一時間の予定など、スケジュールとして様々な示し方がありますが、行事などの特別な日課があるときには長期的な見通しを示すカレンダーや手作りの日めくりなどを示して事前に予告しておくとよいでしょう。長期的な見通しをもつことは難しいことですが、今年は難しくても来年はできるようになるかもしれない、という気持ちをもって取り組むことが大切です。

行事当日には、行事内容を視覚的なスケジュールで示し、その子の出番がいつなのか、何をするのかを示します。手作り絵本やめくり式の絵カード、プリントなど当該幼児の実態に応じたスケジュールを作り、行事の進行とともに当該幼児と一緒に確認します。出番ではない待ち時間には、当該幼児がしてよい活動（お気に入りのグッズや本など）を用意してスケジュールに示し、落ち着いて過ごせるようにします。

また、プールなど当日にならないと分からない予定は登園時、玄関にプールの可否

を示したり、先生と一緒に確認する時間を設けたりします。どのような確認方法とするのかを決めて定着させ、見通しがもてるようにします。

〇その他、全般を通して

話し言葉は消えてしまいますが、絵カードや文字で示す視覚情報は、消えることなくいつでも何度でも確認することができるため、コミュニケーションにおける視覚支援は、障害の有無にかかわらず多くの幼児にとって有効な支援の一つです。見ることなどは能動的な活動であるため、情報が入りやすく理解につながりやすくなります。

言葉の発達の遅れや偏りが見られる幼児や、まだ話し言葉がない幼児の場合には、コミュニケーションの支援方法として絵カードを使用することが有効です。当該幼児の好きなものや好きな活動を絵カードにして、絵カードを先生に手渡す場面を設定し、カードを手渡されたらすぐにその要求に応えることで、カードを渡すと相手に自分の要求が伝わることを身に付けられるようにします。伝えたいことを伝えられるように、段階的に相手や場所、絵カードの内容などを広げていくようにすることが大切です。絵カードと言葉が一致し、徐々に絵カードがなくても言葉で理解できるようにするため、絵カードを使うときには言葉を添えるようにしましょう。また、文字がまだ読めない幼児の場合でも、絵カードにひらがな文字を添えることで、絵カードを使う先生の言葉が統一され、当該幼児の言葉の理解につながりやすくなります。絵カードの大きさや素材などにきまりはないので、使いやすく、当該幼児に合ったもので作ります。

当該幼児には禁止を伝えるよりも、どうするとよいのかを伝えるようにします。してはいけないことを「〇〇しちゃだめ」と言われても、当該幼児が何をしたらよいのかは伝わらないため、何をしてほしいのか、「〇〇します」というように、当該幼児に伝わる方法で伝えるように心掛けることが大切です。

集団の中に速やかに入ることが難しかったり、集団の中に居続けることが難しかったりする場合には、無理やり集団に入れようとはせず、頑張り過ぎて疲れてしまったときや、イライラやモヤモヤするときに一度気持ちを落ち着かせることができる環境（場所やルール）を用意します。その場所には落ち着くことができるように、当該幼児の好きな「もの」「こと」を用意しておき、気持ちを整え、立て直すことができたら、また集団に戻り、活動に参加できるようにします。

（4）困難さに応じた支援を活用して園での遊びや生活を展開する

先生の必要な支援の下で、自閉症などのある幼児などが園での遊びや生活を楽しみ、他の幼児との関わりを広げていけるようにすることが大切です。他の幼児との関わりを深め、遊びを展開していく際に大切なことがあります。それは、自閉症などのある幼児などの困難さに応じた支援を、他の幼児との関わりや集団の生活の中で自然に取り入れていくことです。しかし、その支援によって、他の幼児が遊びを楽しめなくなることは避ける必要があります。自閉症などのある幼児などが、クラスの一員として他の幼児と共に遊びや生活を楽しめるようにすることが大切です。

コラム　紙芝居ごっこを通して（４歳児）

～当該幼児の得意なことを生かして他の幼児との遊びを展開する～

支援のポイント

好きなことや得意なことには、一人で集中して取り組む一方で、皆と一緒に行動するのは苦手なので、自閉症などのある幼児などが好きなものや得意なことを生かしていくことが必要です。

他の幼児との関わりにおける先生の思い

皆と一緒に行動させよう、他の幼児と関わりをもたせようとすると、かえって落ち着かずに不安になってしまうため、じっくりと安心して自分の好きな遊びややりたい遊びを楽しむ経験を重ねながら、他の幼児との関わりをもてるようにしていきたい。

紙芝居ごっこの様子

H児は絵をかくことが好きで、遊びの時間にはいつも一人で世界中の国旗をかいています。先生はH児がかいたたくさんの絵を紙芝居のようにしてクラスの皆に紹介したら、他の幼児が関心をもって見るのではないかと思い、他の幼児と関わるタイミングを見計らっていました。

先生は、H児に「Hちゃんて、こんなにたくさんの国、知っているのね。これ、

先生に貸してほしいんだけど、いい？」と尋ねると、H児は「うん」とうなずきました。先生は、H児の隣に座り、借りた数枚の国旗の絵を使い、オリジナルの紙芝居にして創作の話を始めました。「ここは何という国ですか？」とH児に問い掛けるように話すと、H児は「チェコだよ」と言いました。先生はその言葉に合わせて「チェコに着きました。チェコでたくさん遊ぶことにしました…」と続きの話を始めると、周りにいた幼児が興味をもって集まってきて、先生の問い掛けにH児が応えながら進めるという紙芝居に、自然と聞き入っていました。先生が紙芝居を終えると自然と拍手が起きました。先生は「Hちゃんのかいた紙芝居、面白かった。後で皆に紹介したいから、ここを片付けようね」と促しました。すると、H児は、自分からクレヨンやかいた紙を自分のロッカーに片付け始めました。

降園時、先生がクラスの皆の前で見せると、「Hちゃんの絵だ」「Hちゃん、すごい」という声が上がりました。クラスの皆は自分の知っていることを話したり、友達の話を聞いたりするなど、国旗の話題から様々に興味が広がっていきました。H児も自分がかいた絵がたくさん出てきて「僕の絵だ」と、とても誇らしげで嬉しそうにしていました。

その後、しばらく自分で絵をかいてお話をつくる創作紙芝居ごっこは続き、国旗をかいているH児の周りで一緒に絵をかく幼児たちの姿が見られるようになりました。

他の幼児と共に遊びや生活を楽しむことができるような支援を考える

クラスでは皆で一緒に過ごす時間も楽しいものだと感じられるように、集合時には、必ず楽しいことがあると思えるように絵本や紙芝居、手遊び、歌などを取り入れて、そこにいることが楽しくなるような雰囲気づくりをしていくことは、どの幼児にも大切なことです。そのような時間を過ごす中で、園の生活のリズムに慣れて安心して過ごせるようになっていくことが重要です。

その上で、H児のように一つのことに集中し、他の幼児との関わりがもちにくい幼児には、あえて他の幼児と一緒に遊ぶように無理に誘うことはせず、まずはその幼児のやりたいことができるように十分に時間をとったり、遊具や用具を準備したりします。

クラスの中で当該幼児が一日の過ごし方が分かり、安心して過ごせるようになっ

てきたら、他の幼児と関わるきっかけとして、好きな遊びや得意なことが、他の幼児にも伝わるような働き掛けをしていきます。本人が好きな遊び、本人が始めた遊び、本人が考えた遊びをうまく取り上げて、先生がきっかけをつくり、好きなことや得意なことが他の幼児から認められる喜びを感じたり、クラスの一員としてのつながりを感じたりできるようにしていきます。

一方で、片付けの時間になっても、いつまでも遊んでいるという場面も生じてきます。そのようなときには、無理に遊びを切り上げることはせず、遊びの延長上で当該幼児が納得して遊びを切り上げられるように、遊びや生活の流れを考えて、「かき終わったらおしまい」「最後の一枚ね」「片付けが終わったら、紙芝居が始まるよ」など、事前に言葉を掛けて次の見通しがもてるようにしていきます。

一日の流れが分かるように掲示したり、身支度や手洗いなどの手順を示したりして、視覚情報で、次に何をするのか見通しがもてるような工夫も大切です。